2021年度

（教育学部）

# 問題冊子

| 教科等 | ページ数 |
|---|---|
| 小論文 | 4 |

**試験開始の合図があるまで，問題冊子を開かないこと。**

**解答の書き方**

1. 解答は，問題冊子の指示に従って，別紙の解答用紙の所定の欄に横書きすること。
2. 解答用紙のます目に一文字ずつはっきりと解答を書くこと。
3. 行末以外は句読点に一文字分をあてること。
4. 解答用紙の所定の欄に，受験番号を記入すること。
5. 解答用紙には，指示された事項以外はいっさい記入しないこと。

**注意事項**

1. 試験開始の合図の後，解答用紙に受験番号を必ず書くこと。
2. 下書き用紙は，片面だけ使用すること。
3. 問題の内容についての質問には応じない。ただし，その他の質問等があるときは，手を高くあげ，監督者の指示を受けること。
4. 監督者の「やめ」の指示で，ただちに筆記用具を置き，解答を終了すること。
5. 試験終了後，問題冊子及び下書き用紙は持ち帰ること。

**問題**　次の文章を読んで，後の設問1，2に答えなさい。

**「認められたい」欲望の普遍性**

現代は承認への欲望が増幅した時代，というより承認されないことへの不安に満ちた時代である。人々は他者から批判されることを極度に怖れるあまり，自然な感情や欲望を必要以上に抑制し，周囲への同調と過剰な配慮で疲弊している。

承認への欲望が現代社会に特有のものであり，かつて人間の承認欲望はそれほど強くはなかった，というわけではない。人間が文化を築きはじめたその黎明期から，承認欲望は人間が行為を決定する際の重要な動機となり，個人や社会の運命を大きく動かしてきた。ヘーゲルやコジェーブ，ラカンが指摘しているように，人間の欲望は他者の欲望であり，誰かに認められたいという欲望である。それが最も人間的な欲望であることには，時代を超えた普遍性がある。

人間以外の動物は，空腹になれば何かを食べるし，危険な場所や敵には決して近づかない。生理的欲求に逆らわず，自分の生命を維持し，保存することを最優先する。人間にもこうした自己保存の欲求はあるのだが，しかし一方で承認欲望を持つがゆえに，自己保存の欲求に抗して行動することがある。ボクシングのチャンピオンになって賞賛されるためには，苛酷な減量にも耐えるだろうし，仲間に認められるためには，危険を冒すこともある。

「人間が人間であることは，彼が自己の人間的欲望に基づき自己の(動物的)生命を危険に晒さなければ『証明』されない」(『ヘーゲル読解入門』)というコジェーブの指摘どおり，古来，人間は名誉のために死を賭した闘いを幾度も繰り返してきた。それこそまさに，承認欲望が時代を超えた普遍性を持つ証であろう。

だが現代社会においては，自尊心を守り，自己の存在価値を信じるために必要な他者の①承認が，なかなか簡単には得られない。そのため，かつてないほど他者の承認が渇望され，承認への不安に起因する苦悩，精神疾患が蔓延している。すでに述べたように，それは近代以降，社会共通の価値観への信頼が徐々に失われていったことと深い関係にある。

哲学者のチャールズ・テイラーは，「近代になって生じたのは承認のニードではなく，承認を求めても手に入れられないことがありうるという状況の方なのです」(『くほ

んもの＞という倫理』）と述べている。

近代以前は（社会共通の）伝統的な価値観のなかで個人の役割は固定されていたため，アイデンティティや承認は最初から自明視され，問題化されていなかった。だが近代になると，自分らしいあり方が追求され，他者の承認を介してアイデンティティを形成するようになったため，そこに承認の不安が生じてきた，というわけである。

なるほど，社会に共通した価値観が浸透し，個人の役割も固定されている場合，そこに生きる人々はその価値観に照らして自らの行為の価値を測り，その役割にアイデンティティを見出している。多くの人間が同じ価値観を信じている社会では，その価値観に準じた行為は周囲から承認され，異を唱えられることはない。したがって，そのような行為において他者の承認を強く意識する必要はなかった，と考えられる。

たとえば，キリスト教の価値観が浸透した社会なら，神を信仰する敬虔（けいけん）な態度は周囲から承認されるはずだが，当人は周囲の承認など気にせず，その価値観を信じ込んでいるだけだろう。いかに苦しい生活を強いられていても，そこに承認不安は生じない。

しかし，社会共通の価値観が存在しなければ，人間は他者の承認を意識せざるを得なくなる。誰でも自分の信じていた価値観や信念，信仰がゆらげば，自分の行為は正しいのか否か，近くにいる人に聞いてみたくなるものだ。自己価値を測る規準が見えなくなり，他者の承認によって価値の有無を確認しようとする。こうして，もともと根底にあった承認欲望が前面に露呈し，他者から直接承認を得たいという欲望が強くなる。

現代社会はまさにこのような時代である。宗教的信仰は大きくゆらぎ，政治的イデオロギーへの信頼も失墜し，文化的慣習も流動的になっている。社会に共通する価値規準は崩壊し，価値観は多様化しているため，自己価値を測る価値規準が見出せない。一方で，自分らしく生きるべきだ，という考え方も広まっているが，なかなか「自分はこれでいい」と思えない。そのため，身近にいる他者の直接的な承認にすがるよりほかに術（すべ）がないのだ。

現在，身近な他者の承認が強く求められるようになり，承認不安による「空虚な承認ゲーム」が蔓延している背景には，こうした社会状況の変化がある。

**自由か，それとも承認か**

ところで，社会共通の価値観が強い影響力を持たない社会は，それだけ個人を拘束する社会規範が弱く，自由に行動できる社会でもある。だとすれば，承認不安の問題を考える上で，この自由と承認の関係の本質を見極めることが必要であろう。

特定の価値観が支配的な社会では，誰もが信じている社会の価値規準に準じて行動すれば，一定の承認を確保することができるため，現代的な承認不安とは無縁である。しかし裏を返せば，そうした行動以外は否定され，逸脱した行為は批判の対象になる，ということでもある。中世ヨーロッパのキリスト教社会であれば，信仰に背く行為は決して許されず，厳しく処罰されていたし，共産主義社会であれば，イデオロギーに反する行為は粛清の対象になっていた。そのような社会には，人間の自由はわずかしか存在しないのだ。

一方，現在の先進資本主義諸国のように自由な社会は，西欧の近代化とともに登場した。近代の初期，産業革命や市民革命を通して生き方を選択する自由が拡がり，個人も自由の意識を強く持つようになった。自由に生きてこそ，私たちは幸せになれるのだと，そう考えるようになったのだ。

とはいえ，近代以降も社会共通の価値観(「大きな物語」)が強い影響力を持っているうちは，そうそう自由勝手に行動することはできなかった。最初のうちはキリスト教を中心とする伝統的な価値観がまだまだ支配的であったし，19 世紀になって信仰が衰えはじめても，国家の発展に参与することに理想を見出す人々が登場し，新たな価値観(大きな物語)となった。そしてこうしたナショナリズムは，20 世紀に入るとさらに大きな影響力を持ちはじめる。

このように，近代以後，伝統から新たな価値観へとその重心を変えても，社会共通の価値観は存在し続けた。そのため，どのような行為をすれば他者の承認が得られるかは明快であったが，自由を追求すると社会の極梏(しっこく)を感じざるを得なかったのだ。

しかし現在では，近代化の進展にともない，こうした社会共通の価値観への信頼は失墜し，価値観が多様化した時代に突入している。その結果，人々の自由はこれまでになく拡大したが，どのような行動が人々の承認を得るかは不透明になってしまった。そのため多くの人は，周囲の人間に同調したり過剰に配慮することで，自己価値の承認を得ようとしている。それは再び，自由の抑制につながってしまうのだ。

もはや自由を抑圧するような社会の桎梏を感じることはない。しかしそれでも私たちは，周囲の人間に同調し，自由を抑制して生きている。そうしなければ他者の承認を得ることは難しい，と感じているからだ。これは，近代以降に浮上してきた「自由と承認の葛藤」という問題が，「個人と社会の葛藤」から「個人と身近な人間の葛藤」へと変化しつつある，と見ることもできる。

また同時に，近代のはじめにおいては，承認よりも自由の実現こそが問題であったが，近代後期にあたる現代では，承認の確保がより重要な課題となっている。

出典：山竹伸二『「認められたい」の正体　承認不安の時代』(講談社現代新書，2011年3月，130～135頁)ただし，一部省略・変更した箇所がある。

**設問 1**　下線部①で，筆者は「現代社会においては，自尊心を守り，自己の存在価値を信じるために必要な他者の承認が，なかなか簡単には得られない」と述べていますが，その理由を文章全体の趣旨をふまえて100字から150字以内で述べなさい。

**設問 2**　筆者は冒頭で「現代は承認への欲望が増幅した時代，というより承認されないことへの不安に満ちた時代である。人々は他者から批判されることを極度に怖れるあまり，自然な感情や欲望を必要以上に抑制し，周囲への同調と過剰な配慮で疲弊している」と述べています。こうした時代を生きる子どもたちにどのような教育が必要であると考えますか。具体例をあげて，700字から800字以内であなたの考えを論じなさい。